

亜細亞義会機関誌『大東』に所収される二〇世紀初頭の日本における イスラーム関係情報

——明治末期の日本とイスラーム世界との関係を考察する基本史料の紹介——

三 沢 伸 生

一・ 亜細亞義会とイスラーム

日本とイスラーム世界との本格的な交流は明治期に開始された。しかしながら、その交流がどのように形成され進展していったかという詳細は充分に明らかにされてきてはいない。確かに主に日本人イスラーム教徒たちによって日本とイスラーム世界との関係の歴史についての著作が今までにも、いくつか存在している⁽¹⁾。しかし、そうしたものの多くは、貴重な情報を含みながらも、実際には宗教的色彩が過度であったり、著者の個人的信念に基づく主観的な解釈だったりなどと客観的な事実認定に疑問を残すものが決して少なくない。ようやく近年に至って、日本とイスラーム世界との交流、とりわけ日本および日本人がイスラーム教、イスラーム世界をどのように発見していったのかについて、十分な史料の発掘・分析に基づいた客観的な学術研究が現れ始めてきた⁽²⁾。

こうした研究状況の変化の先鞭を付けたのは一次史料の発掘であった。その筆頭にあがるものとして、小松香織・小松久男両氏によるアブデュルレシト・イブラヒムの旅行記『イスラーム世界…日本におけるイスラーム

の普及』の日本に関する章の訳出があげられる⁽³⁾。イスラーム教徒タタール人であるイブラヒムは、イスラーム世界歴訪の旅のさなか一九〇九（明治四二）年に日本を訪れた⁽⁴⁾。

イブラヒムの来日以前までに、一八八〇—一（明治一三—一四）年における外務省御用掛の吉田正春を団長とするカージャール朝・オスマン朝への使節団派遣に始まって、一八九〇（明治二三）年のエルトゥールル号事件などを通して、すでに日本はイスラーム世界との接点を模索し始めていた。しかしながらイブラヒムの来日は、従来までとは異なる影響を日本に与えた。それは日本の大アジア主義者とイスラーム世界とを結びつけたことにある。イブラヒムは五ヶ月の滞在期間中に伊藤博文、大隈重信をはじめとして多数の当時の指導者たちと会見し、知遇を得た。そして彼のヨーロッパ批判の弁舌は、そうした指導者たちの中における大アジア主義を標榜する国粹主義者たちをいたく刺激した。その結果、イスラーム教徒を弾圧する帝政ロシアを打倒するために日本の援助を欲するイブラヒムと、日本を東亜の盟主としてアジアの団結を目指す大アジア主義者たちは、実際には双方の目的意識は違うものの、表面的な利害の一致をみて手を結ぶ。

そのための機関として、東亜同文会の大原武慶が中心となって「亜細亜義会」がイブラヒムの滞在中の一〇九（明治四二）年六月一日に設けられた。イブラヒムの旅行記には、亜細亜義会の形成過程が生き生きと描き出されている。⁽⁷⁾

日本の大アジア主義あるいはナショナリズムを標榜する団体の中で亜細亜義会は設立過程においてイスラーム世界との接点を求めていくという特筆すべき性質を有する。いわば第二次世界大戦まで連続として続く、日本の「回教」政策の起点とも言うべき存在である。しかしながら、従来までこの団体について詳細な研究はなされてこなかった。その理由の一つとして史料の不備が指摘されてきたが、本稿で紹介するように埋もれていた同会の機関誌である『大東』は、亜細亜義会についてはばかりでなく、二〇世紀初頭における日本のイスラーム関係について第一級の史料である。そこで本稿は発見された『大東』の紹介と分析を通して亜細亜義会が、すなわち日本の大アジア主義者たちがイスラーム世界との間にいかなる交流の実現を目指していたのか、その一端を明らかにしようと試みるものである。

二．『大東』の書誌情報

(一) 所在

亜細亜義会の機関誌である『大東』については、その名称は知られていたが、長いあいだ現物確認がなされないままに放置されていた。⁽⁹⁾ 実際、国立国会図書館をはじめとして大学図書館・研究所など国内の公的機関において所在を確認することができないとされてきた。所在が見られない理由は、『大東』が一般に購読可能な雑誌ではなく、後述するように会員に限

定配布されていたことが想像される。国立情報学研究所（NII）の統括する総合目録データベースWWW検索サービスNACSIS-Webcat（以後、NACSISと略記）においても登録は見当たらない。しかしながら、こうした状況は、残念ながら二〇世紀末から二一世紀初頭において公的機関所蔵図書情報の機械化過程の未整備によって陥ってしまった見かけ上の状況にすぎない。将来的にはいずれ解消されるであろうが、現状においてNACSISで検索可能な図書・雑誌はNACSISに登録された図書・雑誌に限定される。実際に研究機関に所蔵される図書・雑誌の実態がNACSISの登録に正確に反映されているわけではない。しかもこうした弊害は所蔵図書・雑誌の点数が多く、貴重な図書・雑誌の所蔵が多い図書館であればあるほど見られる現象である。

『大東』もこうした不幸な状況に陥ってしまった雑誌である。前述のように公的機関には見かけ上、所在が全く確認されない。しかし、実際には早稲田大学中央図書館に、完揃いではないが、第四年二号（一九一一年（明治四四）年二月）から第五年四号（一九二二年（明治四五）年四月）までの一五号分が所蔵されている。その存在を知り得たのは、筆者が別件で同図書館を利用した際に所蔵カードをくくる中で偶然に発見したことによる。⁽¹⁰⁾

イブラヒムが滞在中に知遇を得た指導者の一人である大隈重信が設立した早稲田大学に『大東』が所蔵されるのは興味深い。所蔵に至るまでの経緯を調査していないが可能性としては次のことが想定されうる。戦前の我が国におけるイスラーム研究組織であった「大日本回教協会」を受け継ぐ形で戦後に復活した「日本イスラム協会」が一時的に早稲田大学に事務局を構えた関係で、大日本回教協会が所蔵していた貴重な図書・雑誌の一部

が同協会の早稲田大学から移転後から現在に至るまで早稲田大学中央図書館に所蔵されている。もしかしたら『大東』もその一部かもしれない。⁽¹¹⁾

(二) 創刊の経緯

『大東』の書誌情報については多くが不明である。巻次に関して早稲田大学中央図書館は、所蔵分が月刊誌であることから、逆算して創刊を一九〇八(明治四二)年、廃刊年月日を不明と推定している。しかしながら、前述のようにイブラヒムの記述を全面的に信頼するならば亜細亞義會の結成は一九〇九(明治四二)年である。早稲田大学中央図書館の類推が正しいとするならば、大原たちはイブラヒムと知遇を得る前年に既に同会を結成していたことになる。同会がイスラーム世界との交流だけを目的とした組織でないことを考えあわせれば、可能性として大原が既存の会にイブラヒムを介してイスラーム世界との接点を求め、イブラヒムにはイスラーム世界との交流だけを目的として創設したと説明していても不思議ではない。ただ、以下に示すように、もう一つ、何らかの理由で既刊の雑誌が会の機関誌に衣替えした可能性も考えられる。

『大東』の創刊の経緯についても疑問が残る。確かに巻表示から逆算すれば、創刊は一九〇八年まで遡る可能性は充分にある。しかし、早稲田大学中央図書館に所蔵分でも巻次の早い、第四年二号を分析するならば、この号に所収される「亜細亞義會会報」にこの時点において亜細亞義會が創設されたように記述されている。すなわち一九一〇(明治四三)年二月六日に、事務所を(東京)市内赤坂区表町二丁目十番地に開設し、同月九・十日に発起人大会の準備会を開いて、その際に常任幹事の中野常太郎

の厚意により無条件提供されて雑誌大東を会の機関誌として定めたと記載されている。⁽¹²⁾さらに続いて同月一四日に発起人会を開き、「主(ママ)意書」・

「会則」・「事業順序」などが審議され、同月三十一日に主意書を天下に発表したとある。⁽¹³⁾この記述によれば亜細亞義會の創設は一九一〇年となるが、ここでのいう創設は、新規創設ではなくて従来まで特定会員に限定されていた私的組織が、公に会員を募集する公的組織に衣替えしたことを意味するのであろう。やはり会の真の創設は従来言われているように一九〇九年、あるいは前に述べたように一九〇八年に求められるべきである。興味深いのは、この時点で会の機関誌が、イブラヒムとも知遇を有し、大原と同じく亜細亞義會の創設に深く関わった『大東京』新聞記者の中野常太郎が個人的に刊行していた雑誌『大東』が、無条件提供によって会の機関誌となったという記述である。また『大東』各号の奥付においても、発行兼編輯人として中野の名前があげられている。このことから前節でも指摘したように『大東』という名称を有する雑誌(しかも公刊誌ではなく、内々の個人誌の可能性が高い)が、亜細亞義會の衣替えにともない、会の機関誌へと衣替えした可能性が出てくる。そうであるならば、早稲田大学中央図書館が類推するように『大東』の創刊が一九〇八年であつても不都合はない。この間の事情は中野にかなする研究が進展すれば解明されるやもしれない。

三. 『大東』に含まれる諸情報

前章で述べたように、早稲田大学中央図書館に所蔵される『大東』は完揃いではなく、同誌に関する網羅的情報が得られるわけではない。こうし

た制限があるものの、次のように亜細亞義会本体のみならず、二〇世紀初頭、明治末期の日本のイスラーム関係情報が色々と得られる。

(一) 表題

表紙中央部に縦書き墨書でもって「大東」の文字が書かれているが、特筆すべきは、目次欄の注意書きに「本誌（大東）の表紙に大東を包める青色の文字は中央部上より印度、アラビヤ、アルメニヤ、西藏両側上より蒙古、暹羅の順序に依り其地方文字にて大東と記せるなり」、また第四年六号からはわずかながら改変がなされ、「……波斯、印度、アラビヤ、アルメニヤ、梵語、西藏両側上より蒙古、暹羅の順序に依り其地方文字にて大東と記せるなり」と特記されるように手書きで各言語の文字表記が書き加えられており、大アジア主義を充分に感じさせるものとなっている（図一および図二参照）。文字の選択基礎は不明である。後述のように外国人評議員、外国人会員の出身国の言語に限定されない。むしろ、次節で扱う「亜細亞義会事業順序」が反映されているように判断される。

(二) 亜細亞義会に関する情報

毎号冒頭部には「亜細亞義会主意書」が日本語、中国語、フランス語の三言語で記される。このうち、フランス語を用いるのは、トルコ、アラビア方面の活字がないけれども、同地方ではフランス語がよく通用するのでフランス語で表記するとの注意書きが目次欄に書き添えられている。第四年六号からは、手書きでトルコ語（オスマン語）とタタール語（チャガタイ語）も加えられ、五言語で表記されるようになる（図四を参照）。恐ら

くは外国人読者や海外への配布をも視野に入れたであろうような多言語対応への積極性は、後に昭和期に創刊されたイスラーム関係雑誌にも見られない。

また巻末部においても様々な亜細亞義会に関する情報が付せられる。全ての号に掲載されているわけではないが、創刊号と目される第四年二号には、前章で述べた全四条からなる「亜細亞義会事業順序」、全一五条からなる「会則」も掲げられる。事業順序によれば、宗教・教育・経済・地理・植民・国交・政治・軍事を研究することに努め、その成果を機関誌に掲載することをうたっている。その上で、中国、タイ、インド、イラン、アフガニスタン、トルコなどに支部を設けること、会員を实地視察に派遣することを述べている。

この方針に基づいたのであるが、第四年八号巻末の予告によれば会員を対象に蒙古語、馬來語、印度語、亜拉比亞語、土耳其語の五ヶ国語の通信教育、馬來語、印度語、亜拉比亞語、土耳其語の四ヶ国語の夜学教育の実施を計画し、受講生を募っている。残念ながら実際の実施については確認できない。（第四年一〇号には、馬來語、土耳其語の夜学講習希望者募集の告知しか見受けられず、他は計画だけで実施が頓挫した可能性が高い）。また同号には、通信員を海外に配置して情報を募っているので、会員に通信の加入者を募っている。配置場所は、オスマン朝のイスタンブル、スミルナ（イズミル）、ベイルート、メディナ、メッカ、ブルガリアのソフィア、カージヤール朝のテヘラン、インドのボンベイ、マドラス、フィリピンのマニラ、中国の廣東廣西、香港、上海、湖北、河南、直隸、滿州附間島、ロシアのウラジオストック、チタ、バクター、カザン、クリミア、

モスクワ、ペテルスブルグである（また、今後に、ブタペスト、バクダー
ト、カイロ、カーブル、デルヒー、カルカッタ、ランゲーン、コロンボ、
ネパール、バンコク、カンボジア、東京、バタビヤ、デリー、パンジャル
マシ、マカッサール、雲南、四川、陝西、甘肅、新疆、西藏、蒙
古、ハバロスフ、カムチャツカ、イルクスク、ポツカラ、チフリス（トビ
リシ）にも配置予定と予告されている）。イスラーム世界の場合、恐らく
は日本人の通信員を駐在させたのではなく、現地人の会員あるいは現地の
人間と契約を結んだのであろう。

会則によって組織として、総裁を頂点にして、三年任期の役員として、
一名の会頭、若干名の評議員と幹事がおかれているが分かる。会員の資格
は、名誉会員（名族・名士）、特別会員（会費二〇年分を前納する者）、正
会員（年会費五円前納する者）の三つに分類されていた。前述のように、
亜細亞義会については情報が少ないとされ研究が遅れているので、その打
開の一助として別掲のように「亜細亞義会主意書」、「亜細亞義会事業順
序」、「会則」を付す（図三を参照）。

同時に毎号、巻末に「日誌」と「会報」が付せられ、会の動向、評議会
の運営、評議員・幹事などの役員さらに会員の顔ぶれをうかがうことが出
来る。総裁・会頭については氏名の記述は見られない。

①評議員

第一回規定評議員報告によれば、評議員は三二名であり、うち一三名が
日本人、一八名が外国人である。選択の理由は示されていないが、爵位を
有する者は自動的に選ばれていたのだろう。外国人の内訳は、アラブ人六

名、トルコ人（オスマン人）六名、タタール人一名、インド人二名、中国
人（清国人）一名、朝鮮人一名、某国人（理由は不明だが秘密にされてい
るのであろう）一名となっている⁽¹⁴⁾。イスラーム教徒が際立って多いのが特
徴である。一ヶ月後の第二回評議員報告によれば、評議員は四一名に増員
されている。増員の十名は全て日本人である。増員の理由は亜細亞義会の
公的組織への衣替えによって新規会員が増員したためであろう。以後、若
干の異動があるもの約四〇名からなる評議員から構成されている。外国人
評議員の中には、インド人のモハメッド・バラカトツラー（東京外国語大
学ヒンディー語教師）のように当時日本で活動していたイスラーム教徒も
含まれているが、全員日本に在住していたわけではない。また本人がどれ
くらい積極的に亜細亞義会に参画していたか、評議員としての自覚があつ
たのか疑問が残る。

〈第二回評議員〉

日本人 板倉勝貞子爵、石黒忠恵男爵（第二回から）、長谷場純孝、
長谷川芳之助（第二回から）、細川利文字爵、小川平吉、
金子彌平、高木益太郎（第二回から）、田中弘之（第二回
から）、内藤魯一、中井喜太郎（第二回から）、中野二郎、
ト部喜太郎、梅小路定行子爵、野田卯太郎、的野半介（第
二回から）、福本誠（第二回から）、小寺謙吉（第二回か
ら）、秋元興朝子爵、佐竹義理子爵、佐々木安五郎（第二
回から）、三宅雄郎（第二回から）、鈴木力

アラブ人 ハナフィー・エフェンディ、ムフト、アーシ、シエリフ

殿下、シェイフ・ムラト・アヴジュリン、セイド・アブド

ル・ザバヒ

トルコ人

チュクリ・オスマン、ターヒル・エフエンディ、アブデュ

ルレシト・イブラヒム、アガールイフ・エフエンディ、シェ

イフルイスラム、シェイフ・イスマイル・エフエンディ

タタール人

サビルザン・アフリヤト・ツノーピチ・サハロフ

インド人

モハメッド・バラカトツラー、薩加夫

中国人

王阿璋

朝鮮人

宋秉峻子爵

某国人

某殿下（匿名）

②幹事

『大東』誌上において幹事の存在は部分的に記載されているが、まとまった形で提示されているのは、第四年七号の会報においてである。⁽¹⁶⁾ それによれば、幹事は七名。いずれも日本人で、犬養毅、大原武慶、中野常太郎、青柳勝敏、頭山満、河野廣中、山田喜之助である（一九一一年一〇月に評議員の中井喜太郎、中野二郎の二名も加わり九名体制になる）。イスラームをはじめとする外国人は全く含まれていない。この七名は第四年二号の会報において、会創設の発起人として名を連ねている七名の顔ぶれと全く同じである。⁽¹⁷⁾ 亜細亜義会の創設者たちについては正確に特定されておらず、議論が残っている。⁽¹⁸⁾ 従来まで指摘される中山逸三の名前が見られないが、『大東』に掲載されているこうした幹事は実質的に会の創設者たちであったのだからと思われる。

③会員

第一回会員報告によれば、会員総数一二二名、うち特別会員三名、正会員一〇九名である。⁽¹⁹⁾ うち二四名が外国人、八五名が日本人である。さらに外国人の内訳は、アラブ人五名、トルコ人（オスマン人）一〇名、タタール人一名、インド人三名、中国人（清国人）三名、朝鮮人一名、某国人一名である。外国人会員の多くは先に述べた評議員と重複しているが、会員であるが評議員ではない者、会員ではないが評議員である者も見受けられる。これらは彼らの亜細亜義会との関わりを吟味する上で重要な情報であろう。

以後の会員数の増加の推移は、第二回が三三名（うち三名は正会員から特別会員への資格変更、よって三〇名が新規正会員。またそのうちの三名が外国人）、第三回が正会員二七名（うち外国人二名）、第四回が正会員三六名（うち外国人一〇名）、第五回が正会員六名（うち外国人三名）、第六回が正会員一二名（うち外国人三名）である。第二回には、明治期の植民地主義活動家として名高い井上雅二の名前も見受けられる。しかしながら全般に会員の増加の割合は高くない。この規模の会であれば、機関誌の発行部数もさほど多くなかったであろう。前述のように『大東』が公共研究機関に残っていないのも無理ないことかもしれない

〈会員ではあるが評議員ではない外国人〉

アラブ人 なし

トルコ人

ハサン・フェミー、アフメト・ミュニル・イブラヒム、メ

フメト・テヴフィク、メジナ

インド人 トラバリー

中国人 母哈母馬西、天寶錢

〈会員ではないが評議員である外国人〉

アラブ人 ハナファイ・エフエンディ

上記のうち、メジナをのぞくトルコ人の三名はイスタンブール大学を卒業の後、一九一〇年一二月に日本の大学で学ぶために来日したばかり留學生である。⁽²⁰⁾

(三) 論文・記事

会則にも明記されているように、『大東』は会員の研究成果を随時発表する紀要としての性格を有する雑誌であった。対象はイスラーム世界に限定されるわけではないが、毎号、イスラーム関係に関する様々な論文・記事が掲載されている。学術的なものから、時事的なもの、あるいは地誌や地図など啓蒙的な連載もある。こうしたことから日本におけるイスラーム研究の先駆的雑誌としての特徴を有していると言って過言ではない。

以下、早稲田大学中央図書館所蔵分に関して、イスラーム関係の論文・記事を著者別に示す(ただし刊行年は略する。第四年が一九一一(明治四四)年刊行であり、第五年が一九一二(明治四五)年刊行である)。本来、全体の中でイスラーム関係情報が占める割合を示すためにも、又、大アジア主義の研究のためにも全論文・記事を示すべきであるが紙面の都合上、イスラーム関係に限定する。

〈外国人の論文・記事〉

アブデュルレシト・イブラヒム

*「本會鞆靴評議員イ氏の書簡」第五年一号、二八―三〇頁。

アフメト・ミュニル・イブラヒム

*「亜細亞に對する歐羅巴の不安に就き」第四年四号、二六―二八頁。

*「波斯に於ける露西亞哥薩克兵の蠻行」第四年五号、二五―二六頁。

*「バクダット鉄道と独逸の勝利」第四年六号、一〇―一一頁。

*「高加索及波斯談」第四年一〇号、九―一四頁。

*「土耳其水雷艇トカド号艇長の談話」第五年一号、一八―二二頁。

モハメッド・バラカトツラー

*「回教同胞主義」第四年四号、三五―三六頁。

*「佳賓と日本回教協會」第四年六号、三八―四〇頁。

*「日本に於ける回教傳導と神戸の回教徒」第四年八号、二八―三〇頁。

*「伊土關係の裏面」第四年一二号、一八―二四頁。

ハサン・フェミー

*「アルパニヤの叛乱に就て」第四年七号、四八―五〇頁。

著者名不明の英國人(紅洋生…訳)

*「メッカ巡禮記」第四年八号、五二―五五頁、第四年九号、五二―五四頁、第四年一〇号、五四―五六頁(以後も継続?)。

〈日本人の論文・記事〉

アブー・バクル(大原武慶)

*「清國に於ける回教」第四年二号、三五―三九頁、第四年三号、二二―二三頁、第四年六号、三四―三八頁、第四年七号、二五―二七頁、第四年八号、六八―七〇頁、第四年九号、五七―六一頁、第四年一〇号、五八―六〇頁（以後も継続?）。

大原武慶

*「世界に於ける回々教」第四年二号、一五―一七頁、第四年七号、一二―一五頁、第四年八号、一〇―一二頁、第四年九号、二七―三〇頁、第四年一〇号、三五―三七頁（以後も継続?）。

懸文夫

*「一九世紀初葉に至る露國の中央亞細亞に對する軍事及外交」第四年六号、一四―一六頁、第四年七号、一六―二〇頁、第四年八号、五八―六一頁、第四年九号、四九―五二頁、第四年一〇号、五六―五八頁、第四年一一号、三四―三九頁、第四年一二号、三四―三七頁、第五年一号、二二―二五頁、第五年二号、一八―二二頁、第五年三号、一八―二二頁（以後も継続?）。

川崎素

*「日本人の見たる土京談」第四年一〇号、一五―一九頁。

天心生

*「マホメットの洞窟入りと靈約」第四年三号、四八頁。

中井生

*「アルパニヤの叛乱に就て」第四年八号、二四―二六頁。

中久喜信周

*「支那回教徒の現状」第五年二号、二二―二三頁。

波多野烏峰

*「暗中の飛躍―日本に於ける回教傳導（上）（下）」第四年七号、四三―四八頁、第四年八号、一五―二〇頁。

*「軍紀と回教」第四年九号、二五―二九頁。

*「攻撃精神と回教」第四年一一号、二二―二六頁。

*「イスラーム劍の宗教」第五年一号、四六―五一頁。

*「五ヶ条の勅諭とコーラン」第五年二号、四〇―四二頁。

無懸生

「土耳其斯坦通信」第四年九号、三八―四二頁。

ハッジ・ウマル（山岡光太郎）

*「アラビヤ紀行」第四年三号、五四―五六頁、第四年四号、五六―五七頁、第四年六号、三〇―三二頁、第四年七号、三一―三三頁、第四年一〇号、四六―四八頁（以後も継続? 未完?）。

楽山人

*「亞拉比亞小誌」第四年四号、四四頁、第四年五号、五四―五五頁、第四年六号、六五―六六頁。

*「亞細亞土耳其小誌」第四年六号、六六頁、第四年七号、五三―五六頁。

〈無名氏の論文・記事〉

*「土耳其斯坦地方に於ける地震」第四年四号、三二頁。

*「嗚呼エルトグロール号」第四年九号、一頁。

*「トリポリ事情」第四年一二号、五五―五七頁。

*「中央亞細亞―青年ツルクメン人よりの書簡」第五年二号、二二―二四頁。

* 「トリポリ戦地よりの通信」第五年二号、二四―二五頁。

〈連載記事〉

* 「土耳其通信」（ときに「土都通信」、「土国通信」とも表記）第四年二号、四四―四六頁、第四年三号、五八頁、第四年四号、四八―四九頁、第四年五号、四九―五〇頁、第四年六号、五八―六四頁、第四年七号、五〇―五二頁、第四年八号、二一―二三頁。第四年一一号、三〇―三二頁、第四年一二号、二四―三一頁、第五年二号、二五―二八頁、第五年三号、二〇―二二頁、第五年四号、二七―三五頁（以後も継続?）。

〈その他〉

* 地図

* 写真

* エルトゥールル号事件関連記事など（第四年九号はエルトゥールル号事件の二〇年祭の特集が生まれ、碑文をはじめとする様々な関連記事が付せられている。雑誌が同事件の特集を組んだものとして特筆される。）

外国人の論文・記事の中でまず注目したいのは、イブラヒムの記名論文が一篇しか所収されていないことである。その論文も、亜細亞義會宛に宛てられた手紙の訳出に過ぎない。イブラヒム自身は亜細亞義會とは彼自身の訪日が契機となって創設されたものであると述べ、評議員としての役割に就いてはいたものの、日本を離れオスマン朝のイスタンブル在住の身としては、会に与える影響力は低下していたのであろうか。イブラヒムにつ

いてはイスラーム世界での活動について研究が進んでいるのに対して、日本での活動および位置づけが研究途上にあるだけに『大東』は興味深い情報を提供してくれている。『大東』における執筆活動として注目されるのは、むしろ日本においてパン・イスラーム主義活動を展開していたインド人のバラカッター、および日本に留学してきたミュニル・イブラヒムである。特にバラカッターの記事は二〇世紀初頭の日本在住の外国人イスラーム教徒たちによる日本におけるイスラーム教弘布の実態の一端を示してくれる貴重なものである。なかでも彼らが「日本回教協会 (The Islamic Association of Japan)」なる組織を結成して亜細亞義會と提携していた事実は興味深い。以上のように外国人の論文・記事の占める割合が比較的高いことが注目されるが、全て日本語に翻訳され、原語で掲載されるものはない。前述のように海外への配布を考えていたのならば問題が残る方針であろう。

日本人の論文・記事の中で特筆すべきは、第一に会の中心人物である、大原武慶である。彼はイブラヒムとの交流の中で、イスラーム教徒に改宗（どの程度の改宗であったかは疑問が残るが）し、自ら望んで第二代正統カリフの名前である「アブー・バクル」を名乗った。⁽²¹⁾ 上記のように大原はアブー・バクル名義で中国におけるイスラームの実態、本名で世界のイスラームの実態を連載している。その分量から見ても『大東』における中心的な連載であったことは間違いない。また大原についてイスラーム教徒に改宗して「ウマル」を名乗った情報将校の山岡光太郎のメッカ巡礼記が連載されていることも注目したい。⁽²²⁾ 山岡はイスラーム教徒に改宗すると、すぐにイブラヒムの助けを受けて、一九〇九―一〇（明治四二―四三）年に

日本人として初のメッカ巡礼を果たした。山岡はその時の記録を『世界の神秘アラビヤ縦断記』と題する本として一九一二（明治四五）年七月に東京の東亜堂書房から刊行した。しかし、上記のように山岡はこの自著の刊行以前に『大東』誌上において、分量としては単行本には遠く及ばないが、少なくとも三回にわたり巡礼記の連載を行っていたのである。連載は次回完結をうたったところまでしか早稲田大学中央図書館に所蔵されないが、単行本の習作あるいは短縮版として執筆されたのかもしれない。さらに異彩を放つ存在として波多野烏峰の論文があげられる。波多野の特異なイスラーム理解とイスラームと大アジア主義とを結びつける姿勢は『大東』所収の論文からも充分にうかがえる。

連載記事として注目したのは「土耳其通信」である。ほぼ全号において掲載されるこの連載記事は当時のイスラーム世界の盟主たるオスマン朝を通じてのイスラーム世界情報を掲載するものであった。情報はイスタンブル発であり、現地の新聞の抄訳を載せたりもしている。情報源としてはイブラヒムおよび彼に近しき人々が想定される。

（四）内外摘要・会報・日誌など

巻末には毎号、内事摘要・外事摘要として内外のニュースがまとめられる。ついで「大東日誌」の標題のもと皇室の活動が記される。

ほぼ毎号、巻末に付せられる会報・日誌は亜細亜義会の活動内容を知る上で第一級の情報を提供するものである。前述のように会の創設に關しても、ここに依拠した早稲田大学中央図書館所蔵分だけでは一九一〇（明治四三）年末から約一年半の動向しかわかり得ないが、今後、『大東』全号

が発見された場合には、亜細亜義会の全貌がここより明らかにすることも可能である。現在、入手中の一五号分でも、前述のように会の創設（ないしは公的組織への衣替え）時における事情が分かった。またバラカトゥラーをはじめとして在日外国人イスラーム教徒たちが頻繁に会の事務局を訪問している事実がうかがえる。残念ながら、そうした会合の内容までは記載されていないが、際めて興味深い事実である。

巻末に、亜細亜義会に寄贈された新刊雑誌・新聞の一覧が付けられている。これによればオスマン朝からも複数の新聞・雑誌が寄贈されている。恐らくは外国人会員の助けを受けて、その情報が必要に応じて記事に反映されていたものと思われる。

四・おわりに

本稿において示してきたように、亜細亜義会の機関誌『大東』は二〇世紀初頭あるいは明治末期における日本とイスラーム世界との関係を解明する上で第一級の史料であることが判明した。そして、それは単に日本とイスラーム世界との交流ばかりではなく、日本の中で形成されてきたナシヨナリズムの形態、とりわけ大アジア主義や国粹主義という概念で表象されている日本社会固有の思想を理解する上においても極めて有益な史料となりうるものである。

残念ながら、『大東』全号の所在は明らかになっていない。大学や研究所など日本の公的機関には所在が確認できない現状であるが、早稲田大学中央図書館の所蔵のように、今後の図書情報整理の機械化の進展によって新たに発掘される可能性が全くないわけではない。さらにNACSISの

対象外となっている公共図書館、民間の図書館・研究所、個人蔵書から発見が期待される。また加えれば、亜細亞義会の性質上、『大東』は日本国内に留まらず、海外にも配布された可能性が大きい。また第二次世界大戦後のアメリカによる日本占領下時において、こうした大アジア主義関連の史料が海外に持ち出された事例も多い。海外においても探索が必要となつてこよう。

そして史料として『大東』全号の所在が確認されれば、様々な他の史料と付き合わせた史料分析により、亜細亞義会の全貌ばかりか、明治期における日本とイスラーム世界の交流の実態が明らかにされよう。本稿はいわば研究途上の史料紹介に終始してしまつたが、史料の重要性を認識し、史料発掘を提唱するために、あえて途中経過を示した。研究の不充分さについては筆者本人も認識しており、読者の御寛恕を賜りたい。

最後に、本稿では『大東』を取り上げたが、同様に歴史に埋もれてしまつた貴重な史料は他にもある。⁽²⁴⁾冒頭に述べたように、日本とイスラーム世界との交流が学問的に論じられるようになった現在、史料の発掘と分析に基づく客観的な実態の解明を目指すためにも、基本的作業としてこのよう重要な史料の発掘を進めながら、今後の研究を展開していきたい。

註

(1) 例えば、その代表的なものとして、小村不二男『日本イスラーム史』日本イスラーム友好連盟、一九八八年。同書の有する価値を全て否定するものではないが、例えば何の確証なしに山田寅次郎がイスラーム教徒であったと断言する記述などを見ると、同書の記述内容に関する史料に基づく再検

証が必要であると断ぜざるをえない。(山田寅次郎がイスラーム教徒であつたかどうかの問題については、拙稿「オスマン朝と日本の関係(一)」『イスラーム社会におけるムスリムと非ムスリムの政治対立と文化摩擦に関する比較研究』[札幌・北海道大学]、二〇〇一年、二二―三―四頁)。

(2) 何より研究史上の分岐点を形成する画期的な研究として、杉田英明『日本人の中東発見』東京大学出版会、一九九五年が特筆される。本書によって研究が立ち遅れていた日本とイスラーム世界との交流に関する学術的研究が開始された。こうした傾向はジャーナリズムをも刺激して、田澤拓也『ムスリム・ニッポン』小学館、一九九八年のような書物も現れた。しかしながら同書は、小村、前掲書など既存の出版物に依拠しながら状況を再構成するにとどまり、再認証も不十分で、新事実・新資料の提示もない。

(3) アブデュルレシト・イブラヒム(小松香織・小松久男訳)『ジャボンヤ』第三書館、一九九一年。原著はオスマン語(アラビア文字で表記される古典トルコ語)で記されて、全二巻からなる浩瀚なものである。Abdürresid İbrahim, *Aleni-İslâm ve Japonya'da İntisarı İslâmîyet*, 2 vols., İstanbul, 1328-31[1910-13]. 筆者もオスマン語原著を所蔵するものであるが、訳本との比較対照の上、訳本は問題ないばかりか、訳者によって有益な訳注が付けられているので、以後、本稿においては訳本を用いることとする。

(4) イブラヒムの生涯、および日本に至るまでの経緯については、イブラヒム『ジャボンヤ』一―四、四〇五―一〇頁、坂本勉「山岡光太郎のメッカ巡礼とアブデュルレシト・イブラヒム」『近代日本とトルコ世界』(池井優・坂本勉編)頸草書房、一九九九年、一七―一八四頁を参照。

(5) この件については、中岡三益「外務省御用掛吉田正春波斯渡航一件」『三笠宮殿下古稀記念オリエント学論集』小学館、一九八五年、二二―二二三頁、岡崎正孝「明治の日本とイラン」『大阪外国語大学学報』七〇―三、一九八五年、七一―八六頁を参照。

(6) この件については、小松香織「アブデュル・ハミト二世と一九世紀末のオスマン帝国」『史学雑誌』九八―九、一九八九年、四〇―八二頁拙稿「一八九〇年におけるオスマン朝への日本軍艦比叡・金剛の派遣」『東洋大学社会学部紀要』三九―二、二〇〇二年、五五―七八頁を参照。

(7) イブラヒム、前掲書、二六四―二六八、三一四―三二〇、三六一―三六三

頁など。

(8) 坂本、前掲論文、一七八頁。しかしながら本稿で紹介する機関誌『大東』のように亜細亜義会に関する新史料発掘の余地はまだ充分あるものと推測される。

(9) 例えば、日本のイスラーム研究の成果をまとめた網羅的目録である、ユネスコ東アジア文化研究センター(編)『日本における中央アジア関係研究文献目録・一八七九年―一九八七年三月』全三冊、ユネスコ東アジア文化研究センター、一九八八―一九八九年、同『日本における中東・イスラーム研究文献目録・一八六八年―一九八八年』全二冊、ユネスコ東アジア文化研究センター、一九九二年において『大東』は収録対象とはなっていない。

(10) 現在では、所蔵カードだけではなく、早稲田大学図書館のホームページ上において同図書館の電子検索システムであるWINE検索により所蔵を確認することが可能である(<http://wine.wul.waseda.ac.jp/>)。筆者の発見当時に比べれば検索の可能性は飛躍的に増大したが、NACISISへの未登録状況に変化はない。

(11) しかし、そうした図書・雑誌には大日本回教協会の所蔵印が捺印されている。『大東』にはそうした所蔵印が見られないので、別経路で所蔵に至ったことも十分に考えられる。

(12) 『大東』第四年二号、一九一一年、五〇頁。

(13) 同上、五〇―五一頁。

(14) 『大東』第四年三号、一九一一年、六四―六五頁。

(15) 『大東』第四年四号、一九一一年、五七―五八頁。

(16) 『大東』第四年七号、一九一一年、六二頁。

(17) 『大東』第四年二号、一九一一年、五〇頁。

(18) 坂本、前掲論文、一八一―二頁。

(19) 『大東』第四年三号、一九一一年、六五―六七頁。

(20) 『大東』第四年二号、一九一一年、五一頁。研究されていないが、恐らく彼らはイスラーム世界から日本へ留学してきた初めての留学生である可能性が高い。

(21) イブラヒム、前掲書、三一八頁。

(22) 山岡光太郎と彼のメッカ巡礼については、坂本、前掲論文参照のこと。

(23) 波多野については、とりあえず、エル・モスタファ・レズラジイ「大亜細

亜主義と日本イスラーム教―波多野烏峰の「諜報からイスラーム」への旅」『日本中東学会年報』一二、一九九七年、八九―一二頁を参照。レズラジイ氏は波多野の遺族への聞き取り調査を行い、波多野の著作を紹介しているが、『大東』所収論文については、いずれも逸脱されている。またレズラジイ氏は波多野を典型的な大アジア主義者として位置づけるが、その根拠をはつきりとは提示していない。波多野は亜細亜義会の首脳部にはなれなかつた人物であり、その独自の活動は亜細亜義会の活動とも一線を画している。当時のイスラームに接近していた日本の大アジア主義者たちに対して彼が有していた影響力に関しては疑問が残るが、その特異な思想は一考に値する。

(24) 例えば、本稿にも登場したバラカトツラーは、一九〇九年から一九一四年はじめまで日本に滞在していたが、この間に彼が刊行していた *The Islamic Fraternity* についても所在が確認されていない。レズラジイ氏はその一部を波多野の遺族より提供を受けたようであるが、同誌の全貌は不明である(レズラジイ、前掲論文、九二頁)。

亜細亞義会機関誌「大東」に所収される二〇世紀初頭の日本におけるイスラーム関係情報

第四年第二號

(二月一日發行)

مشرق اعظم

大

東

دايتو
Daito

॥ देती । । महापूर्वद्विः ॥

亞細亞義會

図一：「大東」第四年二号、1911年の「表紙」

明治四十四年四月二十七日第三種郵便物認可
（毎月一回一日發行）

第四年第四號

دیبو

مشرق اعظم

大

東

دايتو
Daito

亞細亞義會

॥ दैती । । महापूर्वदिक् ॥

॥ ५१६६ । । साङ्ख्यसंकेतयो ॥

亞細亞義會機關誌「大東」に所収される二〇世紀初頭の日本におけるイスラーム関係情報

図二：「大東」第四年四号、1911年の「表紙」

亞細亞義會設立主意

我亞細亞ハ天地秀靈ノ氣ノ鍾ル所其地位タル坤輿ノ中樞ニ當リ疆域ノ大山河ノ雄人口ノ衆物産ノ富蓋シ他洲ノ能ク及ブ所ニ非ズ是ヲ以テ上世文明ノ隆昌大聖ノ崛起皆其端ヲ我ニ發セザルハナシ然リ而シテ近世ニ到リ亞人恬熙偷安或ハ嫉妬排擠同種相疑ヒ相屠リ西力ノ東漸ニ一任ス今ニ及ンテ之ヲ救ハズンバ亞洲ノ前途實ニ憂悞ニ堪ヘザルモノアリシ我亞細亞ハ我人ニ共通セル良風美俗精神性格ノ存スルアリ而シテ亞洲ノ改善向上ハ亞人自カラ大ニ奮勵セザルベカラズ余輩感慨ノ餘リ自カラ揣ラズ茲ニ亞細亞義會ヲ設立シ廣ク全亞洲同志同感ノ士ノ協心戮力ヲ請ハントス

亞細亞義會事業順序

- 第一 本會ノ事業トシテ亞細亞各邦ノ進運ヲ扶植スル爲メ左ノ事項ヲ講究ス
宗教、教育、經濟、地理、殖民、國交、政治、軍事
- 第二 本會研究ノ結果ハ雜誌ヲ以テ之ヲ公ニス
- 第三 本會ハ清國、暹羅、印度、波斯、阿富汗斯坦、土耳其等其其他樞要ノ地方ニ漸次支部ヲ設置ス
- 第四 本會ハ實地視察ノ爲メ會員ヲ亞細亞ノ各邦ニ派遣ス

會則

- 第一條 本會ハ亞細亞義會ト稱ス
- 第二條 本會ハ本部ヲ東京ニ置キ道ヲ亞細亞各邦樞要ノ地ニ支部ヲ設置ス
- 第三條 本會ニ入會セント欲スルモノハ本會員二名ノ紹介ヲ以テ本部又ハ支部ニ申込ムモノトス
- 第四條 本會ニ總裁一名ヲ置ク
- 第五條 本會ニハ左ノ役員ヲ置キ其任期ヲ三年トシ再選スルコトヲ得
會頭 一、評議員 若干、幹事 若干、
- 第六條 評議員ハ幹事會ノ決議ニヨリ之ヲ推薦ス
- 第七條 本會ニ書記其他必要ナル事務員ヲ置ク
- 第八條 必要ニ應ジ幹事會ノ請求ニヨリ評議員會ヲ開ク
- 第九條 毎力一回本會諸般ノ事業ヲ會員ニ報告ス
- 第十條 本會ノ細則及支部ノ規定ハ別ニ定ムル所ニ依ル
- 第十一條 本會々員ヲ分チテ左ノ三種トナス
名譽會員(名族及名士)
特別會員(本會ハ一時二十ヶ年以上會費ヲ前納スルモノ)
正會員(會費トシテ一ヶ年金五圓ヲ前納スルモノ)
本會ニ取得セル金額ハ確實ナル銀行ニ保管シ收支決算ハ本會ノ雜誌ヲ以テ之ヲ報告ス
- 第十三條 會員ハ本會會員名簿ニ登錄ス
- 第十四條 會費受領ノ證トシテ本會ノ雜誌ヲ以テ之ヲ公告ス
- 第十五條 第十一條ノ會員ニハ雜誌並ニ本會編纂ノ圖書ヲ贈呈ス
會員特待ニ關スル規定ハ別ニ之ヲ定ム

圖三：「亞細亞義會主意書」・「亞細亞義會事業順序」・「會則」

亞細亞主義會土耳其文主意識書

آسیائی قای جمعیتک مقصد ناسی

قون العاده نابلندلر طرفلر ، بولندیزدن آسیا نطقسی انشا و دیانک فطرتی ، اهلانک کتشی و اولانینک وسعت و مهورانک
 ییز دلیتله قطنات سازه قفوق اینکده و علم برهنی مان بولمقده در .
 بونک ایچوندر که قدیمره آسیا نطقسی بونک فیلسوفانک دفعلت سیزنک مرید لیبود اولمشیدی . فقط بونکره آسیا ایلیز بونک بر
 نامیا نیشن اولمقده عالمه عاری بر سکونی ناسیه اینکده دیا ماسمه و امیر سید کدی کونن شیهه لکده و بر بونک اولور بونکده در که
 بوسونو استیلو کاکا غریبلده شتر طرفون ایرو لکده میداه ویریلور .
 آرسیرین بونک نظر و تله آخیرجه اولور سره آسیانک اشتیاقانده قورقورور . نیا علی خلقة انعمون منسیر ، طاعات مستحسینیه
 متذکر انکار و سها یار مالک اولون آسیا ایلیز پالانات کنن بونک اصداغ و نشا هیز مالیشی درر .
 یز بونک ایچون نظر اهنیاده آله ره ، آسیائی قای جمعیتی ناسیه ایلیزور . هم آمان شوه آسیا ایلیز کوموشده مساوت
 صا و ناز لری زجا ایریز .
 آسیائی قای جمعیتی مؤسس لری :
 ۱- آرویاکی قانس لرش ، ۲- اوهارا تاکه یوشی ، ۳- اینزاقا تاکه شی ، ۴- طرو یا ما مینس رو ، ۵- قودو هیر و ناقده ،
 ۶- ناکا نور تسنه تارو ، ۷- یاماوا کینوسکه .

同鞫鞫文主意識書

آسیا جمعیتک آچا ورتدن مقصدی

حاضرانده یز طرفیان آسیا ، خلقی هیز وقت اولور بونک اشکه اوستا لغوی بوله دنیای طرفون کینگا لری ، شولا یوق ، آسیا و
 طرفون ایله ده اولور بونک کینگ لکی ، نورلور اوسسکلر بونک کوبلکی ، صولور بونک یخشلی لغی ، طاولور بونک نورلوقیمتلی ماشلور ، و
 سعیدانایله باغلی ایله شهرت طابوب کینگان ، شونک ایچون بورونکی زمانلرده آسیا طرفون اولمقده زور و مالار ، قیلسونار
 ییشوب دنیانک حاضر ک ترقی سینه سینیچ بولغانلر .
 کن بونک یز آسیا خلقلاری بونک بر آنا بالالری ، بر اوروغ خلقلاری بولا طوروب بیزرمون بونک یراق آیرلغان حتی
 بر بونک ده دشما نلارغا نوز ؛ بونک بوغانل کمن دن اولور یورطون ای اوزم صا قلا ی آما ورتدن یا وروبا خلقلار بونک
 مشرقیغه ، بونک او بونک کورولونیه سینیچ بولغانلر .
 اگر حاضر دن آغی کونلرمون قایغیر تما ساق یورطون ک کیله سی کونلری بیک قانغور کورینده . شونک ایچون امن
 طومشده یخشلی خلقلی ، مقبول تار اییاس یز آسیا ایلیز بارمن ایمن نیک حالونیه قایغیر تشورینه و باشقا ایلماشلار بونک
 ده برکه اشلار که چا قوروب آتاری ده او یغا طرفیغه اجتماع اینه رکه تیوش من .
 یز بوسالاروی اوللاب ، آسیائی قای قان ، یعنی ، آسیا خلقی ، اسمای جمعیت آچدق . هم ارجه آسیائی طرفانلر بونک
 بونک او بونک بار اوجیلر بونک بونک یاردم ده بولولری ، اوتنه من .
 آسیائی قای جمعیتک مؤسس لری :
 ۱- آرویاکی قانس لرش ، ۲- اوهارا تاکه یوشی ، ۳- اینزاقا تاکه شی ، ۴- طرو یا ما مینس رو ، ۵- قودو هیر و ناقده ،
 ۶- ناکا نور تسنه تارو ، ۷- یاماوا کینوسکه .

図四：「亜細亞主義會主意書」のトルコ語訳・タタル語訳
 (『大東』第四年六号、1911年より)